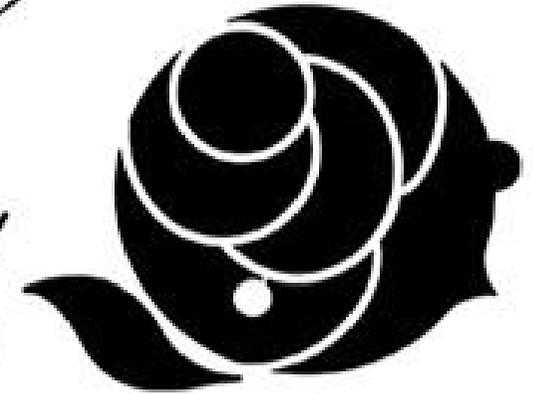


Rosa Plunula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No22

目 次

巻頭言	1
センター運営委員になって	2
個人的体験に基づく教養教育の必要性	4
教養英語改革 - 教養英語教育の在り方 -	6
キャンパス情報 - 各学部から -	8
聞いて欲しい私の意見 - 高校の授業と大学の教養科目の授業 -	12
Voice - 私にとっての教養科目 -	14
教養教育古今東西	
- フィンランドでおこなった少人数ゼミナールの思い出 -	16
掲示板コーナー	17
つぶやき	17

(平成14年1月発行)

以前、ある著名人が色紙に“頑張らない”と書いて注目されました。言うまでもなく“頑張らない”は、頑張っている過程においても心にゆとりを持っていたい、と言うことでしょう。入学されて以来、早くも1年が経とうとしています。

皆さん、大学生活を楽しんでおられますか。生活目標は？既に目標を見出された人はそれに向かって走って下さい。目標に向かって生きている姿は美しいものです。しなやかに、したたかに頑張ってください。一方、まだ目標を見いだせずに迷っている人もおられることでしょう。短い学生時代を考えると残り時間はあまりありません。走りながら目標を探すことだってできます。

なお、“迷う”ということはいいことかも知れません。何も考えない人は迷うこともないのですから。青春時代は道に迷うことばかり。失敗、挫折、迷い、それでいいのだと思います。“岐路ひとつひとつに迷い選り来ぬ還る暦をいざ楽しまん”。これは、前農学部長の丹羽先生が還暦を迎えられた時に詠まれた歌です。先生は還暦を迎えられた時点でやっと迷うこともなくなり、人生を楽しむ境地になられた、ということでしょうか。皆さんは今青春時代の真っ只中にあり、人生の中で最も自由度の高い学生時代を生きているのです。このことを意識して大事にして欲しいと思います。喜怒哀楽を全面に押し出して、悩み、苦しみ、そして迷いながらも、常に心にゆとりを持って“頑張ってください”。

(農学部長 堤 将和)

大学教育研究開発センター運営委員になって

理学部併任教官 西原美一

大学教育研究開発センターが何をするとところかも知らず、とにかく前任者の残りの1年をやるように言われお引受しました。教養教育ということについて、非常に熱心な議論が行われているところで、色々勉強させて頂いております。このようなところに文章を書けるほどの抱負や感想はまだ持っていませんが、これを機会にまじめにセンター運営について考えてみるということかと思っています。

学生諸君はほぼ2年間で、何かを感じている暇もなく教養教育とよばれる時代を通り過ぎてしまうことでしょうか。しかし、大学の教養教育は現在大きな申がり角に来ているとの印象を持っています。委員になって最初にぶつかった問題は、前号(ニュースレターNo21)の理学部教務委員長のキャンパス情報にありますように、教養科目の一部を専門基礎科目に移したことによる歪をどうするかということでした。この問題は、来年度はとりあえず理学部1年次生を対象にした専門基礎科目の一部を他学部の2年次生以上に開放するというで落ち着きました。しかし、ここで明らかとなったことは、高校との接続科目の取り扱いが学部単独では処理できないということで、現在、教養教育を充実させるための検討がはじまっています。理学部の先走った熱意がこのような議論をうながすきっかけの一つになったならば幸いだと思っています。

教養教育というのは大学4年間の一部として切り離されたものではないことは明らかで、今後茨城大学がどのようなレベルの学生を世の中に送り出すのかということをも十分検討し、その中で必要と考えられる社会人教育、人間教育、専門基礎教育をきちんと行ってゆくべきであろうと思います。特に専門基礎教育は、最終的にどの程度のレベルの学生を社会に送り出すのかを考慮して、4年間または6年間全体の中で位置付ける必要があると思います。もし茨城大学がこのさき高度職業人養成大学としての役割を担うとするならば、このところは最も重要な部分であろうと思います。

学生諸君が茨城大学でどのようなことを学んで社会に出たいと考えているのか、大学にどのような教育を望んでいるのかなど、その声を反映することができ、茨城大学が今以上に活発な生き生きとした大学として生き残れるようになる道が拓けることを期待しています。

工学部併任教官 堀 井 龍 夫

私は本大学で教官として採用されてから長い期間を夜間教育に携わっていますが、Bコース担当として初めて教養教育における教育の計画を行うという役を仰せ付けられました。このようなセンターが在ることさえほとんど知らない無頓着な奴だった私は、まず、それまで目を通したとは言い難い分厚い資料に向かいました。周知のことですが現在大学では学生の低学力化を憂い、成績評価基準の在り方および授業の改善に関する案件が決定されてきています。センター委員になって初めてこの資料を目にした（それまで見なかったわけではありませんが理解しておりませんでした。）時には、これは学生の意識改革ではあるが、教官の意識改革を要求するものだと感じたものですし、そのように記述もされています。この成績評価基準の設定・シラパスの充実・オフィスアワーの実施はすでに分割して審議決定されていますが、GPA・履修上限など最終目標である学生の一定以上の実力・知識習得の達成を目指すためのシステム作りがまだ未決定となっています。

今回の教育改革でよりよいシステムが確立し教官側の意識も改革できたとしても、学生側の意識改革は今のままでは不十分なような気がします。勉強することへのモチベーションが見えてこないからです。私は近年の学力低下は大学入試の簡単化、易しい試験問題が出題されていることが一因であると考えています。別に学生の能力が劣ってきたわけではなく、難しい問題に慣れていないだけだと思っています。困難な問題に向かい合おうとする意欲を学生に求めるにはそれなりの勉学への動機付けを必要とします。ここが現在の学生に欠けている点あるいは教官が与えていない点であると思います。そのため、何故勉強する必要があるのかを理解させ自主的な勉学への推進力を生み出すか、あるいは勉学への強制力を学生に与えなければ、教育改善は形式だけに終わってしまう可能性もあります。学習に対するモチベーションを持たない学生達の評価結果から判断して評価点の取り扱い方法を決定することのないように願いたいものです。昨年からの教育改革の審議は始まっており私は遅れてきた人間ですが、今年からでもその改革の中に居ることができることは幸いに思います。教養教育のセンター委員としてよりも自分自身の意識改革という立場で意見を述べさせてもらいました。

個人的体験に基づく教養教育の必要性

「コーラン」は存在しません

人文学部人文学科
助教授 神田大吾

昔むかしのその昔，まだ私が大学生だった頃，教養科目はどれも楽勝科目(^ ^)v でした。大教室で先生が一方向的にしゃべるだけ。毎年講義内容も同じなら，決まった場所で決まったギャグを入れることで有名だった先生もいたりして。いくら休んでも，試験前に友達にノートを借りればそれでOK。出る問題もだいたい予想がつくから，あらかじめ「模範解答」のコピーも出回ってたしね(^ ^;)

で，つつがなく教養科目を取り終えて卒業した私ですが，それでめでたしめでたしならば，人生は単純。でも，違ったんだな。

茨城大学に赴任してフランス文化を教え始め，授業の準備をするためにフランスのことを調べれば調べるほど，イスラーム文化の影響があちこちに見え隠れする。で，軽い気持ちで放送大学に聴講生として入学し，教養科目「イスラーム世界史」を受講しました。すると，目からうろこが落ちる連続。驚くことばかり。

たとえば「レバントの海戦」。オスマントルコの艦隊が全滅し，ヨーロッパ側の大勝利。それは事実です。でも，そのわずか一年後，オスマントルコ軍は再び，ほぼ同規模の艦隊を組んで威風堂々押し寄せて来た。そのくらい，当時のオスマントルコは超大国だったのです。そんなこと，高校の時には習わなかったよなあ。

知ってたつもり。でもほんとは知らなかった。それを体験するのが教養科目なんですね，きっと。

たとえば「コーラン」。これ，実は英語。「アラビア語を適当に（適切に，ではなく，いいかげんに）音写したもの」*なので，イスラームの教典とは言いながら，イスラーム教徒の人が聞いても「何，それ？」って感じで，誰も知りません。

「クルアーン」が正しい。

名前さえ知らなかったんだから，中身なんか，もっと知らない。

たとえば「目には目を」。この掟は「やられたら，やり返せ」という意味だとばかり思いこんでました。砂漠の民族は野蛮だな，とも思っていましたけど，実際は全く逆で，もしも目をつぶされたら，お返しに目をつぶすこと「だけ」は権利として許す，という意味であり，「怒りにかられて，それ以上やってはいけない」と，過剰報復を厳しくいましめる教え

なのでした。しかも更にその続きがあって、「しかし一番いいのは、その権利を放棄すること」、つまり相手を許すことだとクルアーンには書かれているのです。

全然、違うじゃない(;)。ね。

どこから見るか、どの窓から見るかで、見える風景ががらりと変わる。教養科目の数だけ窓がある。あちこち、のぞいてみましょうよ。

さて、今年最大の事件は言うまでもなく、貿易センタービルのテロとそれに続くアフガニスタン空爆です。ついこないだまで「カブールはイランの首都」と言い兼ねなかった私です(^;)が、九月以来、ヘラートに、ジャララバードに、カンダハル。やたらと詳しくなりました。アフガニスタンの民話の主人公は一人も知りませんが、北部同盟のドスタム將軍ならば顔と名前が一致します。これって、教養？

ちょっと、違うかも知れないね。

*東長靖『イスラームのとらえ方』山川出版社，1996年。

教養英語改革 - 教養英語教育の在り方 -

外国語専門部会長
永井典子

IT化が想像以上のスピードで、日本社会を揺さぶっている今日、英語の実践的運用能力養成の必要性が、これまで以上に深刻に叫ばれている。英語の実践的運用能力とは、ただ単に、「話す・聴く」イコール「英会話」を意味しない。英語をコミュニケーションツールとして、使用できる能力である。この場合、世界的に電子化された情報の80%が英語で書かれている事実や、学術論文の70%以上が英語で書かれている現状を踏まえると、どの情報を取り込み、どの情報は無視するかという取舍選択技術、即ち、多読、速読技術も、英語の実践的運用能力に含まれる大事な能力である。

実際、TOEICなどの英語資格試験で、日本人学生の点数は、リスニングよりもリーディングで低いという実証データもある。また、世界的に多量の情報が英語を媒介として流れている現在、英語での情報発信能力の育成も、これまで以上に必要であろう。

このような現状を踏まえ、教養英語教育をどのように改革していくのかは、我々に課された大きな課題の1つである。英語教育のみならず、大学での教育を議論する際に、まず我々が考えなければならないことは、教えようとしている科目が技術習得を目的とした授業（スキルクラス）なのか、知識を身につけさせるための授業（コンテンツクラス）なのかを考える必要がある。

なぜなら、このどちらのタイプの授業であるかによって、授業の運営方法が大きく異なるからである。同じ教養英語でも、上記で述べた実践的運用能力を養成するための授業は前者、即ちスキルクラスである。一方、英語文献やその他のメディア情報を基に、異文化理解を深める授業はコンテンツクラスである。そして、この2つの異なるタイプの授業を教える場合、それぞれのタイプに適した授業の体系作り、運営方法を考えることが大切になる。

スキルコースの場合、ある一定のスキルを修得させることが目的になるので、授業としては、習熟度別クラス編成をすることが必要であろう。さらに、それぞれのレベルで明確な到達目標を設定することが大切であろう。スキルコースに関しては、何も大学の授業だけでなく、技術を習得するためのクラスでは、習熟度別クラスになっている。たとえば、自動車免許を取得するための自動車学校での、クラスなどもそうである。

技術習得クラスの場合、習熟度の異なる学生が1クラスに混在すると、その授業の達成目標を明確に定めることができず、効果的な授業を運営することが困難になる。英語の場合、大学入学までに、6年間の英語の授業を受けているが、入

学してくる学生の英語の習熟度には大きな差がある（これは、どのように英語の授業が中学、高校でなされてきたかによっても異なるので、必ずしも学生個人の問題ではない）よって、これらの学生を習熟度によってクラス分けし、最も適した授業を履修させることが必要であろう。

また、ある技術を習得する場合、学生が自立的に学ぶことも必要となる。なぜなら、大学の週1回または2回の授業だけでは、実践的英語の運用能力を身につけるには充分ではない。実際、5歳で子どもがある程度ことばを自在に運用することができるようになるまでには、1日8時間その言語に接していると少なめに見積もっても、8時間×365日×5年で、14,600時間その言語に接していることになる。ところが、大学の週2回の90分授業では、1年30回の授業が行われたとして、(1.5時間×週2回)×1年間30回で、90時間にしかない。よって、学生が自主的、自立的に学べるコンピュータラボなどの施設を整備し、学生が自ら学べる環境を整えることが大切である。

コンテンツクラスの場合は、その授業を履修するのに十分な技術を身につけているかが問題になる。例えば、英語文献や他のメディア情報を基にした異文化理解の授業などの場合は、英語の表現能力や読解能力があるレベルに達していることが履修の前提条件になるだろう。そうでないと、異文化理解の知識を深める授業（コンテンツクラス）なのか、英語の講読の授業（スキルクラス）なのかが明確にならず、何を目標にしている授業なのかがわからなくなってしまっておそれがある。

21世紀を生きていく学生に必要な英語能力は何か。その能力を確実に身につけさせるためにはどのような改革をしていかなければならないのか真剣に考え、実行しなければならない時期に来ていると思われる。

キャンパス情報 各学部から

人文学部から

大学のキャンパス内で出会う学生たちの顔は様々です。茶髪など髪を染めた学生の姿もまったく珍しくなくなり、みなそれぞれのキャンパス生活を楽しんでいるように見えます。

その一方で、教室のなかで見かける学生の顔は、どことなく覇気がなく、ほとんど反応はなし。下を向いて携帯電話の小さな画面とにらめっこしている姿もちらほら見かけます。

顔は、その人の人となりや如実に現れるもの。顔で人を判断するなと怒られるかもしれませんが、顔は作られていくものですから、自分の顔には責任を持たねばなりません。さてあなたは、どんな顔をして、毎日の生活を送っているでしょうか？

楽しければ笑い顔になり、悲しければ泣き顔になる。実は、その逆もありえます。つまり笑い顔でいれば楽しい気分になり、泣き顔になれば悲しい気分になる。どういふ顔をして生活を送るかが大切なのは、それが気分と連動しているからでもあります。

私はベトナムをフィールドにしている研究者です。ベトナム人学生の表情の素晴らしさを、はっきり言って日本人学生の比ではありません。教室での反応の良さもずば抜けています。なぜなのでしょう？何が違うのでしょうか？

いい顔をして生きたいもの。表情を少しだけでも変えてみませんか？それだけでも自分の世界は、確実に変わるはずで

(人文学科教務委員 伊藤 哲司)

教育学部から

茨苑祭も終わって、皆さんは一段落というところでしょうか。

ところで、新聞などの報道でもご存じのように、現在、日本中の大学が大きな改革の波のただ中にあります。茨城大学も例外ではなく、未来を見据えた抜本の見直しを行っていますが、教育学部でも新しい教員養成のあり方を視野に入れて、組織の改編を伴う大幅な改革を検討しているところです。

これら改革の中で重要なのは、大学あるいは学部が高い教育の理念をもつこと、そして、それに基づいて学生諸君が人間としての知性と教養、さらに社会で役立つ専門性を身につけられるような教育の実現を目指すことでしょう。

その一つのステップとして、全学部において、平成14年度の入学生から新しい成績評価システムを導入することになりました。現行の4段階評価から6段階評価に変わりますが、改革のねらいはもっと深い所にあります。つまり、私たち教員が、授業の内容や方法を充実させ、その上で学生諸君の学修成果を厳正に評価しようというものです。そのため、教養科目を始め教育学部でも、これまで以上に授業の選択や受講の助けとなるよう、シラパスの内容を改善します。例えば、到達度の目安と成績評価の方法が新たにつけ加わります。こうして評価の客観化をはかります。さらに、全ての教官がオフィスアワーを設定し、決められた時間に学生の履修相談などに応じる体制を整えます。

新しいシラパスやオフィスアワーは在学生にも提供されます。学生諸君には、これら一連の改革をよく理解していただき、よりよい学修成果をあげられるよう期待します。

(教育学部教務委員長 山根 爽一)

理 学 部 か ら

大学の授業で、学生さんから教えられることは少なくない。

主題別ゼミナールのことである。教養科目唯一の少人数クラス形式の授業で、理学部では学科ごとに6本程度1年あるいは2年次生を対象に開講している。学科によって開講年次がことなるが、それはこの授業をちがってとらえているからである。地球生命環境科学科では2年次後期の開講であるが、受講生にある程度の専門的な志向をもとめていることによる。それに対して1年次で開講する学科では新入学生に学科の内容を紹介する授業と考えている。理学部ではこのように、学科の意向を尊重しながら全体のバランスがこわれないうカリキュラムの運営をはかっている。

わたしは自然史科学入門という科目を担当している。そのおもなねらいは理科系文章作成法の修得にある。全体のまとまりをつけることにはじまり、主題一述語のつながり、句読点のつかい方などの留意点をあげ練習問題をかんがえる。そしてテーマをあたえてレポートを作成させ、校閲する。今年は、はじめて三題問題形式のテーマをあたえた。企業の入社試験小論文によくつかわれる形式である。「同時多発テロ」、「狂牛病」、そして「大学」の三つの課題についてまとめよ、というテーマを設定することにした。学生さんは、想像していたように苦労してレポートを書いていた。こじんまりとまとまったものから、こじつけ的なものまで様ざまだ。三つの課題のあいだにユニークな視点から共通点をみいだしてまとめたものもあった。このようなレポートにはスーパー優をつけたいし、参考資料でつかわれた結論をその

まま流用したようなレポートには不可をつけたくなる。最もおおかった論旨は、テロ問題や狂牛病など社会的に大きな関心をひきおこしている問題にかんして、大学は何らかの対応をとるべきだというものであった。たとえば、特別講演会を開いたり、関連する講義があればその中で取りあげたらどうだろうかというわけである。今、日本の国立大学を席卷しているいわゆる遠山プランや独立行政法人化問題、あるいは大学再編問題にふれたものはきわめて限られていた。

このゼミナールでは、常に社会的な問題に関心をはらい、かんがえる癖をつけることも学生にもとめている。入社試験対策としての意味もあるが、もちろんそれだけではない。入社試験では社会人としての必要な資質がためられているからである。それは社会的な問題にたいして自分の意見をもつことだとおもう。大学としても学生さんにそのことを要求するのなら、まず大学自身の問題を学生さんにも可能な範囲で公表し、かんがえる機会をあたえることが必要ではないだろうか。上記のレポートで大学問題にたいする言及がなかったのは、大学側が学生さんに的確な情報をつたえていないことにも原因があるとおもう。

農学部スクレーパー問題に対する大学の説明、独立行政法人化あるいはいわゆる遠山プランにたいする大学の基本的立場などは、教授会などに閉じておくのではなく、大学の全構成員で共有すべきとおもうがいかがなものだろうか。

(理学部教務委員長 森野 浩)

工 学 部 か ら

秋も深まり、街路樹が紅や黄色に染まり始める 10 月 27, 28 日の両日、2001 年度こうがく祭が実施されました。こうがく祭は水戸地区の茨苑祭や阿見地区の鋤耕祭に相当する日立地区のイベントなのですが、数年前に色々な事情により中断していたのを昨年多くの先生方や実行委員の方の努力により再開した経緯があります。私自身も立ち上げに少し関わってそのときの苦勞を知っておりますので、それを無駄にしないためにも今年はなんとしてでも成功に導かねばならないと密かに決意して今年度の準備を始めました。最終的には 30 程度の企画が集まり、グラウンドで音楽関係のイベントも実施されました。私自身もこうがく祭当日現場にいたのですが、通りがかりの近所の方が気軽に立ち寄ってサークル団体が出していた店で昼ご飯を買って食事をされているのを見て、こうがく祭の目指すべき方向(地域密着型)がおぼろげに見えてきたような気がします。

こうがく祭準備期間中、及び開催当日は、学部長補佐機関、工学部学生委員会の諸先生方、学務第二係長をはじめとする事務官の方々、イベントに直接参加して下さった先生方等、色々な方にお世話になりました。また、こうがく祭の準備段階から開催に向けて努力を続けてこられた 2001 年度こうがく祭実行委員会の皆様、及び彼らをサポートして下さった

2000 年度こうがく祭実行委員会の皆様に感謝の意を表します。
来年のこうがく祭も成功しますように!!

(工学部学生委員 出崎 善久)

農 学 部 か ら

農学部では、昨年(1999)の10月26日から28日にかけて鋤耕祭が開催されました。初日には一年次生を水戸から迎え、中島紀一先生による「農業と自然との共生」をテーマとした講演、各研究室のポスター展示による研究室紹介、研究室、農場、学生寮などの施設見学といった一年次生対象の企画が催されました。みなさんが来年から生活の場とする阿見キャンパスの雰囲気を感じ取ることができたのではないのでしょうか。夕方には懇親会があり、教官や上級生との親睦が深められたと思います。二日目からはステージ企画、各サークルが主催する模擬店、作品展示、いも掘り体験教室など趣向を凝らした催し物が用意され、地域の方々との交流が見られました。期間中は天候にも恵まれ、盛況のうちに終了しました。鋤耕祭は農学部に登録しているサークル団体の一つである鋤耕祭実行委員会によって企画される年に一度のお祭りであり、日頃の学問や研究、サークル活動を学外の方に見てもらう絶好の機会でもあります。昨年度は鋤耕祭実行委員の人員不足から開催が危ぶまれましたが、前年度の鋤耕祭実行委員のバックアップにより今期につなげることができました。鋤耕祭実行委員会は2年生主体の団体であり、来年度はみなさんが中心となって鋤耕祭を企画することになるでしょう。農学部全体の活性化のためにも一人でも多くの方が鋤耕祭実行委員として活躍し、第53回の鋤耕祭を今まで以上に盛り上げてもらいたいものです。

(農学部学生委員 中島 雅己)

聞いて欲しい私の意見 - 高校の授業と大学の教養科目の授業 -

神門 佳代（教育学部 1 年）

大学では教養科目があることは入学前から知っていた。私は“一般教養”という言葉の響きから勝手に浅く広く勉強する授業だと思い込んでいた。が、しかし、実際は専門科目と変わらない内容の濃さではないか！高校では大学入試を意識して入試科目のみ勉強するという事は少なくない。教養科目は高校で習う内容を理解しているという前提のもと進められるものもあるため、私は授業についていけないものもある。特に文系の私にとっては自然の分野の授業は悲惨である。

では、自分の興味のある内容の授業や、予備知識のある授業を取れば良いではないかと自分なりに考えた。そこで意気揚々と後期の予備登録をしたのだが、二つも抽選にもれていた。結局あまり興味のない授業を単位のために受けざるをえなくなる。もちろん学生として授業についていけないのなら予習をするべきである。でもシラパス通りに進んでいかない授業もあるため、一体何を予習していいのか分からないのだ。

高校の授業では、先生が一から十まで丁寧に教えてくださる。予習する内容もページを指定して教えてくださるという親切ぶりである。この点が高校の授業と教養科目の授業の違いである。もちろん大学生が全ての事を指示してもらうまで解決できないのは困る。分からない内容は自分で先生に質問に行くべきである。しかし、専門ならとにかく教養科目にまで手がまわらないというのも現実である。授業内容を専門としてない学生もいることを意識して講義をしていただきたい。学生は正直である。おもしろい授業は真剣に聞くし、予習もきちんとしてくる。そして授業がおもしろいかどうかは、自分が授業内容をしっかりと理解できているかどうか大きく左右されるのだ。

吉田 拓也（理学部 4 年）

高校、大学で授業をあまり真面目に受けたことがない私がこんなことを書けた身分ではないと思うのだが、今までの経験から思う所を書き出してみる。

大学という高等教育でなぜ教養科目などというものが設けられるのだろうか。教養という言葉を探ると『広い範囲の知識から得られる心の豊かさ』とある。教育では“心の豊かさ”も養うことも求められているコトかも知れない。

私のいる理学部では卒業単位の 124 単位中、最低 38 単位が教養科目でなくてはならない。実に卒業単位の 3 分の 1 が教養科目なのである。“心の豊かさ”を重視しているように見える。

しかし、その単位の大半は1年次に履修しなければならない。私が大学に入ったときは、それまでのつまらない受験教育からやっと専門教育を受けられるという喜びにあふれていた。しかし、その1年間のほとんどの授業をやりたかった専門科目とはかけ離れた教養科目で費やすことになるのである。そして私はもともと持っていた専門科目への熱意を失ってしまった。

現在の教養科目は押し付けに過ぎないと感じている。教養科目の講義では真剣に聴講している学生などほとんどいないのではないだろうか。真剣に受けていない講義で“知識”など身につくはずがないだろう。つまり、そこでは“教養”が身につくはずがないのである。結局、私には時間と金の浪費としか思えなかった。

私が大学に求めていたものはより深い専門知識である。“心の豊かさ”とは違う。私のような目的を持って大学に入る者にとって、そんな教養科目は必要ない。

月山 奈穂（農学部1年）

金曜日、三限日の授業で教授からこの原稿の執筆を依頼された。その時はあっさりと引き受けてみたが、いざ原稿用紙を目の前にすると、何を書けばいいか全然まとまらない。だから、思った事を率直に書いてみようと思う。

大学の授業はとても自由だ。登録だけして全く授業に出てこなくても、授業中居眠りをしていても、注意されることはほとんどない。やれ出席率だの授業態度だのうるさく言われていた高校の授業とはえらい違いである。しかし、その自由に私は甘えてしまっている気がする。大学では、授業を受ける上での責任は学生自身にある。自らが意欲を持って臨まなくては、多くの見返りは期待できない。教師がいろいろと面倒を見てくれた高校の授業とは違う。これは正直ちょっと怖い。逆に言えば、意欲を持って臨まない限り講義以上の物を得ることが出来ずに、教養科目を終えてしまうかもしれないからだ。私達農学部は、一年次で多くの教養科目を履修するが、その中から何を身につけたかと聞かれたら、答えられる自信はあまりない。（私だけかもしれないが）もうすぐ十二月、今さら遅い決意なのだが、今までの反省もこめて、少しでも多くのものを身に付けたいと思う。そのための教養科目なのだし、それは結果的に、大学生活をさらに充実させてくれるのだから。

山崎 理恵（人文学部2年）

一年次の時間割は、ほとんどが教養科目でしたが、二年次になり専門科目が増え、授業の大半が専門科目となっています。

教養科目を振り返ってみると、自分が興味のある分野から専門分野外の授業まで、多様な分野で様々なことを学びました。

私の学科では、教養科目の中で特に外国語科目の授業数が多く、一年次では週に五コマ以上入っていました。予習やテスト勉強は大変でしたが、その反面、数多くの授業をこなすことによって、外国語能力の向上をはかることができました。また、外国人の教官に教わることにより、実践的なコミュニケーション能力が身に付くだけでなく、外国の文化や価値観なども知ることができました。

この他にも、教養科目には情報関連科目やゼミ形式での授業、自分で選択履修する主題別科目などがありますが、教養科目を通して、様々な知識や幅広い視野を身につけることができます。

鈴木 香織（教育学部2年）

教養科目には、自分が興味を持って学習すれば知識が増えるけれど、ぼーっとしていたらただ時間だけが過ぎてしまうそんなイメージがあります。出席重視の授業では、教室へ来て返事をするとはっとした気持ちになり、途端に眠気が襲うこともありました。気付いたら授業が終わっていた、このような経験を何度したことでしょう。しかし、それでもなんとかなるような安心感を抱いてしまうのも、教養科目の不思議な特徴のように思います。

高校では、知識をつめこむ教育が中心でした。しかし、大学では授業の選択の幅が広がり、自由に学べるようになりました。授業選びをしっかりとすれば、好きな授業だけを受けることも可能です。教養科目で苦労するかどうかは、科目選びにかかっています。友達と一緒に授業をとることも良いでしょう。でも、友達と意見が違ったときには、自分が心惹かれるほうの授業を、選ぶようにしましょう。最初は心細いかもしれないけれど、すぐに新しい友達はできます。興味を持てる授業に出合えたら、そこで得られるものは多いと思います。

学部外にも友達の輪が広がりやすいことが、教養科目の一番良い点だと思います。同じ授業をとっていると、共通の話題が生まれ話をしやすくなります。実際、友達と仲良くなるきっかけが、授業だった人も多いのではないのでしょうか。

授業へのまっすぐな取り組みは、きっと自分のためになるはずです。授業に臨んだときに、もっと新しいことを発見したい、考えたいと積極的な気持ちでかかわっていたら、教養教育をもっと充実したものにできたのではないかと思います。

窪田 倫子（工学部2年）

今では教養科目をあまりとらなくなりましたが、1年生の頃はほぼ毎日教養科目の連続で、大学では専門の事だけを学べるものと思っていた入学当初の私にとって、少し拍子抜けだった。しかし、今振り返ってみると、教養科目は、ただ専門科目を学んで一つの視野に限られた人間を作るのではなく、これから社会に出て行くための基盤となり得るような、必要最低限以上の事を学ぶものだと思えるようになった。専門科目の狭く深く学ぶのとは対照的に、教養科目は広く浅く学ぶことができ、一般常識や様々な知識を得るためには最適なものだったと思う。私が苦手な人文系の科目にしても、様々な授業があり、その中から自分が興味あるものを選び、楽しんで受講できた。そして、その人文系科目を通して漢字検定にも挑戦し、級を取る事ができた。きっと、そんな機会がなかったら漢字検定など全く関係ないものだっただろう。教養科目は自分に自信をつける良い機会を与えてくれた。

英語などの外国語も、学んでいることがこれからの国際社会に通用していく上で十分役に立っていくだろうし、勉強する機会があるというのは大変良い事だと思う。

今では専門科目の授業が毎日ぎっしりつまっていて、化学や物理学で精一杯で、教養科目ばかりやることに不満だった頃が懐かしい。専門科目ばかりでは社会人としてやっていけないと思うし、教養科目は知的な良い息抜きにもなっていたように思う。そんな今だからこそ、教養科目のありがたさを実感している。

フィンランドでおこなった少人数ゼミナールの思い出

工学部システム工学科助教授 乾 正知

フィンランドは、美しい森林と湖に恵まれた自然豊かな国ですが、情報通信の分野では、世界のトップを走るハイテク国家でもあります。私は2年ほど前に、この国の工学教育の中心であるヘルシンキ工科大学で、4週間ほどゼミ形式の授業をする機会がありました。このゼミは、図形処理技術の先端的な利用法に関するもので、前半で幾つかの代表的なアルゴリズムを紹介した後で、後半でそれらを利用したプログラムを作ってもらうことにしました。参加した学生は全部で5人という、本当に小さなゼミでした。

わずか5人でしたが、学生たちのバックグラウンドは驚くほど多様でした。まだ少し幼さの残る学生もいれば、企業に勤めながら大学に来ている中年の方もいます。専攻も、情報系、機械系、化学系と様々です。これだけ違っていると、授業が成立するのか心配になりますが、シラパスに書いておいた受講の条件をよく検討してきているようです。授業中に疑問を感じるとすぐに尋ねてきますし、参考書を紹介しますと、きちんと目を通してきます。結果として一人の脱落者もなく前半を終えました。ゼミの後半は、「必要があればメールを下さい」とだけ言って、あとは学生に任せたのですが、どの学生もきちんと（いや、期待以上の）プログラムを作ってきて、私を驚かせました。

私にとってゼミの4週間は、これまでにない緊張した時間となりました。慣れない英語での授業ということもありますが、疑問点を直ぐに問い掛けてくる学生の姿勢が、私に万全の授業準備をさせるプレッシャーとなりました。専門知識では負けないという自信はありますが、プログラミングなどでは学生のレベルのほうが高いこともあり、いつも自分が試されているような気持ちでした。

翻って茨城大学では、私はこのように緊張感を持って授業をすることは稀です。準備は怠りないつもりですが、学生から質問がくることはまずありませんし、課題を出しても、予期した以上の答えが返ってくることはほとんどありません。結果として、こちらの説明も通り一遍のものになりがちです。大学教育の改善が叫ばれていますが、そのためのベストの方法は、「良い樟葉をしなきゃ」といつも教官に感じさせる学生の姿勢なのではないか、そんなことを考えさせられた4週間でした。

掲 示 板 コ ー ナ ー

電子掲示板の利用について

平成 13 年度から，共通教育棟において，電子掲示板により，休講・教室の変更・集中講義及び大学の行事等を掲示されておりますが当分の間，学生の呼び出しや試験等については従来どおりの掲示板によりお知らせしますので注意して下さい。

掲示板を見ないことにより，所定の期日までに手続きなどができず，不利な取り扱いを受けることもあります。登校，下校，授業の合間には従来の掲示板と電子掲示板の両方の掲示に注意して下さい。

- 毎 日 3 回 は 見 ま し ょ う -

つ ぶ や き

大学教育研究開発センターの「ローザ・ブルムラ」ニュース・レター第 22 号をお届けします。11 月になって全学改革の動きが急に慌ただしくなってきました。教養教育関係についても，11 月早々に全学将来構想委員会のなかに教養教育等分科会が改めて設置され，平成 15 年度改革完全実施に向けて教養教育の教育システムの抜本的な改革のための検討が急ピッチで始められたからです。例えば，外国語科目については，科目区分，履修基準等の見直しを含む実践的習熟度別クラス編成が具体的に検討されています。習熟度別クラス編成は，当然，情報教育へも波及していくはずです。いずれ本年度末迄には平成 15 年度教養教育実施方針が決定されます。

このような改革の動きの流れのなかで，ニュース・レター第 22 号でも目次の各項目を一部更新し，教養英語改革について外国語科目専門部会長に執筆願い，また，高校との接続教育についても学生諸君の意見に耳を傾けてみました。

(笹 倉)

発行日 平成 14 年 1 月
発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京 2 - 1 - 1
029 (228) 8416 (学生課教養教育係)

